

聖書:使徒の働き13章26～41節

説教:信じる者は義と認められる

はじめに

ここは、パウロがピシディアのアンティオキアという町の会堂で、ユダヤ人たちに前にして福音を語っている場面です。非常に熱心語っているパウロですが、何年か前まではパリサイ派の若きエリートとしてクリスチャンとわかれば男も女も捕らえて牢に投げ込み、過酷な迫害をするような人でした。それがあるとき、突然まぶしい光に照らされて地面に倒れてしまうという経験をします。目が見えなくなっておろおろしていたら、不思議な声が聞こえてきました。「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか。」サウロが「主よ、あなたはどなたですか」と問うと、このような答えがありました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」

それまでサウロは、神の前に正しい者となるために一生懸命神のために奉仕すべきだと考えていました。それで熱心にクリスチャンを迫害してきたのです。神を愛してきたはずが神を迫害する罪人だと言われる。もう駄目だと思ったでしょう。ところがイエスは意外なことを語る。「立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならないことが告げられる。」後に明らかになるのですが、イエスの名をユダヤ人にも異邦人にも伝えていく、それがサウロに与えられた新しい使命でした。その使命に従って、パウロは会堂に集まったユダヤ人たちの前でイエスの名を語っていきます。彼が何を語ったのか、そしてそれは私たちにどのような関係があるのかを見てまいります。

1 外国に住むユダヤ人

詳しく見ていく前に、パウロの話を知っているのはどんな人たちであったのか。そのことを確認しておきます。最初にも触れたように、場所はピシディアのアンティオキアという町です。イスラエルではなくて今のトルコ共和国に位置していました。

皆さんはシルクロードということばを聞いたことがあると思います。シルクロードの西の端にはヨーロッパに入る玄関があって、それが実はこのアンティオキアのあたりだったそうです。物が行き交えば人も行き交う。そこにユダヤ人たちが沢山集まって来た。会堂を建てて、安息日には礼拝をします。礼拝の中で旧約聖書が読まれますから、よく学んでいます。

2 イエスの身に起きたこと

1) 罪に定められる

そのような人たちに向けて、パウロは27節でこう語ります。「エルサレムに住む人々とその指導者たちは、このイエスを認めず、また安息日ごとに読まれる預言者たちのことばを理解せず、イエスを罪に定めて、預言を成就させました。」

会堂にいるのはイスラエルではない海外に住んでいる人たちですから、エルサレムで起きた十字架のことはうわさでしか聞いていない。そこでパウロはきちんとあのときあそこで何が起きたのかを説明していきます。エルサレムの人たちがしたことの具体的な事は28節です。「死に値する罪が何も見いだせなかったのに、イエスを殺すことをピラトに求めた。」イエスが裁判を受けられたときの裁判長がピラトです。ピラトはイエスを見てすぐに、この男は死罪となるような罪は何も犯していないとわかった。せいぜい鞭で打って釈放すればよいと思っていた。ところが民衆が「イエスを十字架につけろ」と叫び、このままでは暴動になるのを恐れたピラトは、急に手のひらを返すようにしてイエスを死刑にした。それが事の真相です。

2) 木につるされ殺される

なにも罪がないのに罪をかぶせられて、十字架というむごい処刑をされる。これ以上の理不尽なことはないでしょう。けれどもなぜかイエスは一言も自分のことを弁明しようとしません。まるでほふり場にひかれていく羊のように黙って十字架につるさ、殺されていきました。

3) 神はよみがえらせた

もし話がそこで終わるなら、あわれな男の物語に過ぎません。でもパウロはその続きを語ります。30節。「しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせました。」

皆さんが初めて教会に来たときのことを思い出してください。イエスがよみがえられたと聞いて、すぐに信じられましたか。おそらく、そんなのありえないと思ったのではないかと私はそうでした。

会堂に集まっていたユダヤ人たちはどうだったか。実は、ユダヤ人の間では意見が二つに分かれていた。パウロがかつて属していたパリサイ派はよ

みがえりを信じていたけれど、合理的な考え方に立つサドカイ派の人たちは信じない。

3 父祖たちに語られていた救いのことば

1) 詩篇2篇7節

それでパウロはどうしたか。ユダヤ人たちが立っている土台から出発します。ユダヤ人は旧約聖書を信じています。その旧約聖書に何と書いてあるか、ひとつひとつ思い起こさせていく。パウロはここで四つの箇所を取り上げていますが、今日は最初の二つだけ見ましょう。まず33節で詩篇2篇7節を取り上げます。「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ。」

2) イザヤ書55章3節、第二サムエル記7章12～14節

「わたし」とは神のことだとわかる。でも、「わたしの子」とはいったい誰のことか、これだけ言われてもわかりにくい。そこでパウロは次に34節でイザヤ書55章3節を取り上げます。「わたしはダビデへの確かで真実な約束を、あなたがたに与える。」「ダビデへの約束」とは何か。私たちにはすぐには思いつきませんが、ユダヤ人ならすぐにピンときます。第二サムエル記7章12～14節のことを指す。「あなたの日数が満ち、あなたが先祖とともに眠りにつくとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が不義を行ったときは、わたしは人の杖、人の子のむちを持って彼を懲らしめる。」

「あなたの身から出る世継ぎの子」とは、目で見るとダビデの子であるソロモンと思われた。でもソロモンの王座は長く続かない。やがてイスラエルは北と南に分裂し、国は滅んでいきました。そうすると、神が語ったのはソロモンのことではない。ソロモンの後にそのような王を与えてくださる、ユダヤ人たちはそのことはちゃんと信じていた。イザヤ書でもダビデに語った約束は必ず果たすと神は確認してくれている。でもそれはだれのことなのか。そこで登場するのが先ほどの詩篇2篇7節。「わたしが今日、あなたを生んだ。」「生んだ」ということばは、神が神のひとり子イエスを死からよみがえらせてくださり、再びいのちを与えてくださった。そのようにとることができる。

ユダヤ人たちは先祖代々、第二サムエルはもちろん詩篇もイザヤ書も全部読んで知っていた。安息に会堂で読んで聞いていた。ところが、エルサレムに住む人たちは、聞いていたみことばがイエスを指すとは理解できなかった。それで神のひとり子を殺してしまった。

4 知っていただきたい

1) 罪の赦しが与えられる

初めて教会に行ったらいきなり「あなたは罪人です」と言われ、戸惑ったという方もいるでしょう。「私は犯罪者ではない」とたいていの人は反発します。でもパウロは、二千年前のユダヤ人だけに語っているのではない。今ここにおられるみなさんにも語っている。あなたは神の前に正しい者なのかどうか。問いかけてきます。「正しい人間などいない」と開き直るかも知れません。でも心は平安でしょうか。自分でも感じているはずです。私は人に言えないあのことこのことをしている。隠している。ほかの人を傷つけた、迷惑をかけた。でも謝っていない。誰かを憎んだまま何年も赦せない気持ちでいる。人の持っている見て妬む。そんな自分を思い出すたびに心がうずいて苦しい。それが私たちの姿ではないか。もしそうであるなら、私たちは全員イエス・キリストを十字架にかけて殺した罪人なのです。

2) 信じる者は義と認められる

この世の中は、自分の弱さを認めることは敗北であると言います。幸せになるためには勝たなければならぬ。だからもっと強くなれと叫ぶことができます。そんな生き方をずっと続けてきたので、自分が弱い者だと認めるのは恐ろしい。神に怒られるのではないかと恐れる方もいます。

神はどうされるのでしょうか。39節。「この方によって、信じる者はみな義と認められるのです。」ただ信じなさい。そうすればあなたのすべての罪は赦され、神の前に正しい者とされ、神はあなたを大喜び出迎えてくださる。

こう言うとまた疑いの目で見られます。「信じるだけで救われる？だまされてはいけません。ただほど高いものはない。絶対、後から高額な請求書が来るに違いない。」

確かに神は私たちに請求書を送っています。あなたは神のひとり子を十字架で殺しました。つきましてはその罪の代償としてこれこれのものを支払いなさい。この地球上のあらゆる財宝を持っても支

払えない高額な金額です。いったいどうすればいいのか。

安心していただきたい。既にイエスが十字架で支払ってくださっています。神のひとり子がいのちを捨てたのです。それで支払ってくださった。だから請求書はまわってきません。

本当でしょうか。パウロを見てください。パウロは神に逆らい、自分の弱さを認めようとせず、自分は正しい人間だと思い込んでいた。でもよみがえられた主イエスに出会ったとき、自分の罪を認めざるを得なくなる。その迫害していた主イエスを通して彼は罪の赦しをいただく経験をした。後から請求書は回ってこなかった。

だから安心して、ただ信じるだけ。後は何もいらぬ。実に簡単です。ところがどうでしょうか。皆さんの中にも、信じるのは難しいと感じている方がいるかもしれない。大丈夫です。焦る必要はない。待てばよい。そうしたら時が来る。私などは一秒前まで信じるなどということを考えたこともなかったのに、あるとき自分の罪から目をそらすことができなくなって、口から出任せで「教会に行く」と叫んだのです。次の日曜日牧師の所に行き、聖書を学ぶことになった。そうしたら、これは自分が求めていたことばだとわかってイエスを信じました。不思議です。

神が私たちを救うとき、いろいろな方法をとります。例えば、あるとき自分はもう長くはないと感じるときが来るかも知れない。あるいはあるとき、わたしの愛する者が死んでいく、どうしよう、そのように絶望するときが来るかも知れない。そんなとき思い出していただきたい。死からよみがえられたイエスを信じなさい。たとえあなたが死ぬことになっても、たとえあなたの愛する者が亡くなることになっても、手遅れということはない。死からよみがえられた方が私たちの救い主なのだから、絶対にあなたを見捨てることはしない。このかたには滅びというものがないのだから、私たちにも滅びはない。だからはやくわたしのてをつかんで救われなさい。主イエスが差し伸ばしてくださっている手を、迷わずにつかんでいただければと願います。